

●五十年前と似たような空気を感じます。秘密保護法という言葉のせいもあるのでしょう。後期高齢者となり、身体も重いのに、頭も尚痛みます。

とよださなえ

署名について

朝日新聞を財布から
十円玉を気軽に出して
求めた男は考えた

新島反対のカンパをやっている机の前を
通りすぎてしまった時

いや 考えたのは
コーヒーを一口飲んで
タバコの
一本に火をつけた時だった

机の前の彼の財布が
はまぐりのようにしまっていたことを

男が机の前を通りすぎた
男はいそいでいて とても
立寄って署名する時間もない積りであった
それでも
男は本が好きだったので
本屋の新しい雑誌をみていくのが常だった

この二人の男
世の中の問題には精通していて
なかなかの理解者の積りでいた

机の前を酔っぱらった男が一人
署名を呼びかける三人の男に
陰気なのしりの言葉を投げ
危い足どりで遠のいていった

酔っぱらった男が机の前で足を止め
署名は断りながら

咽頭をからした三人の男を
陽気に元気づけて
百円を入れていった
男は酔っていても
住所を書き入れる署名は好きでなかった

これで都合 通行人の数からいえば
表には
四ツのブランクが出たことになった

— 1 9 6 1 3 ・ 4 —

おねむの話

ママ お話して
浦島さんは おとひめ様に
何を御馳走になったの？
お魚は食べなかったのでしょうか？
踊りを踊ってくれたのですもの

そうよ そうですね
もっと おいしいものよ きっと

ママ お話して
もっとおいしいものって なあに
お肉？
海の中に 牛や鶏なんていないわねえ

そうよ そうですね
さあ もう おやすみなさい

ママ お話して
どうして おとひめ様は
浦島さんのおみやげに
たまたばこをあげたの？
おじいさんになってしまって
可愛そう

— 1 9 6 4 ・ 1 2 ・ 2 0 —

あつまりのうた

啄木もマヤコフスキーも
うたった会議のうた
あつまりのうた
たばことコーヒーのあるテーブル

もし 私が
可愛い 無邪気な犬だったら
深刻ぶった顔には
水を！
人馬鹿にした唇には
この爪を！
不安におびえた首筋には
長い毛のしっぽを！

この人たち さっきから
狭い部屋の中で
肺病にもならず 動こうともせず
何？ 何が欲しいの
手を出してもせず 歩こうともしないで

コーヒーの量が一・五センチメートル
減ると
博学と称される男の話が終る
日本ハ 貧シイ
世ノ中ハ 悪イ
進歩的な言葉は
白いハンカチに似た
アクセサリー
勿論 警察法改正のならなかったことは
前提条件
それから
せめて
冷蔵庫と洗濯機が欲しいといった
妻の言葉のせいでなく
そんな運動の為に
自分の物は
一物も失いたくないという精神

兎に角
危険はまっぴら
そんな運動に関係するなら
自分は望まれた形で
しかも
常に
労働者に教える立場で！

— 1 9 6 4 —

オランウータン

オランウータンは
日本語で 森の人って
いうんだって
だから
あんな恰好で
考えごとしてる

私がさっきから
みてるのに
知らん顔して
ポツンと一人
カメラをむける
行列を みている

— 1 9 6 4 ・ 1 2 ・ 2 0 —

エッセイ：雲とエジプト

「雲一つない空」と言えば、お天気の最高の賞め言葉だ。カイロに住んでも、日本の時と同じ気持ちで毎朝空を見上げていた。毎日毎日良い天気、まっ青な空には 雲が一つもなかった。

日本では天気予報を聴きながらも、人それぞれ空を見、その日の身づくろい、傘、洗濯、外出等自分で判断しようとしている。雲行きとか雨を予想している雲。たなびく雲のたえまより もれいずる月 とか 薬師寺の塔の上なるひとひらの雲 など古い歌にも出てくる雲。風景画も和洋を問わず雲が描かれている。ターナーの絵は雲を大切にしているように見える。ラファエロの「箱舟の建造」ブリュゲルの「バベルの塔」等宗教画の中にも雲がある。情緒や文化を感じさせる脇役以上の働きをしているのだろう。カイロの空のお

陰で、雲の存在を意識させてもらった。カイロの住人が日本に住んだら、四季と気候の変化にうんざりし雲のないカイロをなつかしく想うのではないだろうか。

ナイル河はカイロの市内を通っていて、アフリカ内陸部の水を集めて地中海にそそいでいる。紀元前五世紀の古代ギリシャの歴史家ヘロドトスは「エジプトはナイルの贈り物」と言っているそうだ。増水期のナイル河の流量は利根川の平時流量の二・六倍とゲーグルが教えてくれた。ある日 二百キロ離れたアレキサンドリアに行った。東窓に水田が見えてきた。エジプト米は日本でも準国内産として扱われていたという。一キロ十円位で米粒大の小石混り、三十円の高い方はネフェルティティという初代の女王様の名を冠したものの。いずれも味は良い。水田の緑は濃く、空には白い雲が浮いていた。ポツカリと。カイロを離れてはじめて見たエジプトの雲。高校の世界史の先生のを思い出した。"クレオパトラの鼻の高さのことじゃなくて、ローマはナイルデルタが欲しかったんだゾー、その時、自分がその場所に行くことがあるとは、思ってもみなかったのに、改めて驚ろいた。

たまたま見ていたテレビで、イエメンの蜂蜜とりの話の中、年一回の雨降りの場面があった。雨が降り出して後、十分でワディ*を急流がほと走っていた。しかも翌朝その水は消えていた。それでも村人たちは雨に感謝して踊っていた。カイロに三年半住んで、二度雨が降った。はじめての時、二才と四才の子とピチピチチャプチャプランランランと浮かれながら雨にあたった。食堂に入ると女中さんも秘書も、愛想の良いコックさんも、変に不機嫌だった。土埃をかぶって咲くブーゲンビリアだって、雨に洗ってもらって喜んでいられるのだろう。後で運転手さんが説明してくれた。屋根のない家に住んでいる人々は寝具も濡れてしまう。カイロは道路の側溝や下水道が不備だから、行き場のない水で街中ひどい状態という。雨が止んで、カンカン照りの中、子供二人と街を見に出た。ゴミと土埃が雨水でドロドロなのを、車が派手にお店のガラスにもはね上げていた。歩く人々にも、自転車の人にも。皆しかめ面だった。アスファルトの道が、突然とんでもない存在となってしまう。二人の子供もはしゃいだのがうそのように黙りこくって歩いた。雨は降らないという前提で切り捨てられる生活があるということ。無いものねだりは止めて、あることに感謝する努力をしよう。

*ワディ ふだんは水のない砂漠の谷